おばあさんゾンビ

黒犬ちわわ

「おばあさんゾンビ」　黒犬ちわわ

　ある日、おばあさんが死んだ。

　死んでから数日後、庭を歩いているおばあさんを見つけた。
　おばあさんは、死んだあと、十分ほど歩いた先の丘にある共同墓地に埋められたはずだ。
　土の下で深い眠りについているはずのおばあさんが、なぜここにいるの。
　私はかすかな物音で目を覚まし、窓から夜の闇の中を見つめた。
　おばあさん。すぐにそうだと気づいた。

　月明かりだけがぼんやりと照らす庭の中を、のそりのそりと歩いている人影がある。その動き方には見覚えがあった。右足を引きずるように歩いていたおばあさん。死んだあとも、右足が痛むんだね。でも、杖はもう持たなくても平気なんだね。
　家を一周するように、おばあさんは歩いていた。家の正面まで来ては、扉をじっと見つめていた。そしてまた庭をうろつきだした。二階の私の部屋をふと見上げることもあった。
　家の中に入りたいのだろうか。
　でも、だめ。死んだ人は一緒に暮らせない。

　朝になると、おばあさんはもういなかった。両親に話すと、大好きなあなたに会いに来たのね、と言われた。でも死んだおばあさんは怖い、と私が答えると、叱られてしまった。亡くなった人の悪口を言ってはいけません。

　その日の夜も、おばあさんは現れた。
　昨日と同じように庭をぐるぐるを歩き回っている。父も母も、気づかないのだろうか。
　おばあさんは私に会いに来てくれたのだ。私は部屋の窓を開け、おばあさんここよ、と呼んでみた。静かな暗い空に吸い込まれていった自分の声が怖かった。
　おばあさんは少しの間こちらを見上げていたが、すぐにまた歩きだした。私なんかに興味はなさそうだった。私はがっかりしてベッドに戻った。
　翌日もおばあさんは来ていた。おばあさん、いったい何の御用なの。教えてくれないと、人には伝わらないのよ。ちゃんとお話してから頼みなさい、と言っていたのはおばあさんじゃない。
　私は一度、両親に教えようと、下まで降りていった。でも二人とも裸の運動に忙しそうで、部屋には入れなかった。
　おばあさん。もう、おばあさんのことに注意を向ける人は、いないのよ。

　おばあさんは自分の部屋を持っていなかった。ほとんどを台所で過ごしていた。足も不自由なため、外を出歩くことも少なかった。
　おばあさんの持ち物は最初から少なかった。おばあさんがいたという証拠は、すでにこの家からなくなっていた。

おばあさん、ひとりで寂しいのね。でも、この家におばあさんの居場所はもうないの。

おばあさんは毎夜、庭に来ていた。いつも遠くから聞こえる犬の遠吠えと同じだと思い、私は気にしなくなった。
おばあさんが死んでからしばらく経った日、母が言った。父も休みで朝からくつろいでいた。
「なんて新鮮なんでしょう。毎日が新婚の気分よ。お義母さんがいた時は、なんだか、見張られているようで……」
母は父と目を合わせた。二人の顔は生気で満ち溢れているようだった。
その夜、両親の寝室の前をうろつくおばあさんを見て思った。おばあさん、あなたは気になるのね。息子夫婦が何をしているのか。

寒い季節も終わり、そろそろ暑さがやってくる頃だった。窓を開けると、腐り具合が進んだおばあさんの臭いが、二階まで昇ってきそうだった。
おばあさん。もうしばらく待つの。そうすれば、二人は窓を開けっ放しにして寝るわ。運動だって、窓を開けたまま。去年の今ごろだって、かすかな声がこの部屋にも届いていたもの。台所の椅子で眠るおばあさんにも、聞こえたんじゃないかしら。
今年は、堂々と聞けるのね。だって、死んでしまえば、ルールなんて必要ないもの。命令をきかなかったからといって、母にいじめられる心配もないし。
がちゃり、と窓の開く音がした。何このにおい、と言う母の声がした。それから、父との楽しそうな笑い声。私は眠っているふりをするため、ベッドで横になっていた。
やがておばあさんの引きずる足音が聞こえてきた。裏手から回ってきたのだろう。家の正面で足音は止まった。二人の笑い声はまだ続いていた。
急な沈黙。そして叫び声。駆け回る足音、物が壊れる音。一層高くなる声、そして再び静かになった。
ずるり、と窓からすべり落ちる音がした。引きずる足音は丘の方へと向かって遠ざかっていった。

やっと私は静かな家の中で眠れるようになった。